

「輝く群れとして」

使徒の働き 3章1－10節

鄭 ヒムチアン

■前 奏

■開会賛美「聖歌 94番」

■祈 り

■主の祈り

■神学生挨拶 ドゥイガ・ロドニー神学生 挨拶後、牧師による祈祷

おはようございます。本日は教会創立記念礼拝です。この土浦めぐみ教会が立てられてから67年が経ちました。はじめに土浦めぐみ教会の今までの67年を短く、動画にまとめましたので、ともに見ましょう。今日までの67年を振り返り、そして今日からの教会の未来に思いを馳せましょう。 <動画再生>

神様はこの67年の間、本当に素晴らしい祝福を与えてくださいましたね。実に多様で豊かな教会の姿です。この生き生きとした喜びが教会に絶えず主によって与えられることを願いつつ、みことばから主の御声を求めて参りましょう。

使徒の働き 3:1－10

- 1 ペテロとヨハネは、午後三時の祈りの時間に宮に上って行った。
- 2 すると、生まれつき足の不自由な人が運ばれて来た。この人は、宮に入る人たちから施しを求めるために、毎日「美しの門」と呼ばれる宮の門に置いてもらっていた。
- 3 彼は、ペテロとヨハネが宮に入ろうとするのを見て、施しを求めた。
- 4 ペテロは、ヨハネとともにその人を見つめて、「私たちを見なさい」と言った。
- 5 彼は何かもらえると期待して、二人に目を注いだ。
- 6 すると、ペテロは言った。「金銀は私にはない。しかし、私にあるものをあげよう。ナザレのイエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい。」
- 7 そして彼の右手を取って立たせた。するとたちまち、彼の足とくるぶしが強くなり、
- 8 躍り上がって立ち、歩き出した。そして、歩いたり飛び跳ねたりしながら、神を賛美しつつ二人と一緒に宮に入って行った。
- 9 人々はみな、彼が歩きながら神を賛美しているのを見た。
- 10 そしてそれが、宮の美しの門のところで施しを求めて座っていた人だと分かったと、彼の身に起こったことに、ものも言えないほど驚いた。

使徒ペテロとヨハネが祈るために宮に行ったとあります。この2人が宮に向かっていったことから、驚くような出来事が起こりました。ペテロとヨハネが祈るために宮に向かっていくと、そこに一人の男性が運ばれて来たのです。その人は生まれつき足が不自由な人でした。どれほど不自由であったかという、「運ばれて来た」とあります

から、立ち上がり歩くことが不可能だったでしょう。まったく歩くことのできない男です。そしてこの男が何故運ばれてきたのかというと、2節後半にこうあります。「宮に入る人たちから施しを求めるために、毎日「美しの門」と呼ばれる宮の門に置いてもらっていた。」その門を通る人たちから施しを求めてのことでした。

＜資料スライド＞ この美しの門とはエルサレム神殿の東側にあった門で、この門を通してまっすぐ進むと祈りやいけにえを捧げる聖所、神の宮に繋がっていきます。つまり、この門は宮に通じる入り口であったのです。そして、この門が「美しの門」と呼ばれた理由ですが、この門は真鍮、そして金銀からできていて、ご覧の通りきらびやかに輝く美しい門であったからです。この門に運ばれ、そして男はこの門を通る人から施しを求め始めたのでした。

彼は毎日門に置いてもらっていたと書いてあります。毎日施しを求めなければを暮らしていけなかったのでしょう。彼は一日一日を生きていくために、その日の人生をつなぐための施しを求めています。祈りの宮へと繋がるきらびやかに輝く門の前で物乞いをしている一人の男。想像してみてください。何が見えてくるでしょうか。

この門とこの男はあまりにも対照的です。しかし、そんなことはこの男が自身が一番良くわかっていたのではないのでしょうか。人に物を乞うという恥ずかしさ。通り過ぎる人の冷たい視線がもたらす強い孤独感。そして神殿に入っていく人を見ながら思うことは、「神がいるなら何でおれの足はこんななんだ！」と、強烈に込み上げてくる激しい怒り。彼はあらゆる辛酸を舐め尽くしたでしょう。

いや、もうこのような感覚は、とっくの昔に消えてしまったのではないのでしょうか。4章22節にはこう書かれています。**「このしるしによって癒やされた人は、四十歳を過ぎていた。」(使徒4:22)**

生まれてから40年以上、歩くことができなかった彼はこれまでどれだけ耐えがたく、苦しい理不尽な日々を過ごしてきたのでしょうか。彼の日々を想像すると、むしろ、彼はもうあらゆることに無感覚になっていたのではないかとさえ思います。いや、ただ一つだけ。自分の目の前を人が通ったことを察知する感覚だけが鋭くなっていったのではないかと思うのです。

宮に入っていくペテロとヨハネにも、いつもと変わらない「通り過ぎていく人」に声をかけたのでしょう。しかし、この声は彼の人生を変えるはじまりとなりました。

4-5節

4 ペテロは、ヨハネとともにその人を見つめて、「私たちを見なさい」と言った。

5 彼は何かもらえると期待して、二人に目を注いだ。

ペテロとヨハネは、今まで彼の前を歩いていった人たちとは違いました。彼の前を通り過ぎてはお金を置いていった人たちとも違ったでしょう。なぜなら、この2人から今まで聞いたこともない言葉をかけられたからです。「私たちを見なさい。」この男はびっくりしたでしょう。何が起きたんだと驚いたでしょう。そして、この男は懸命にこの状況を理解しようとしたはずです。

その時、ふと彼の心の中から長らく忘れていた思いがふっと湧き上がって来たのです。なんだったのでしょうか。期待です。「何かすごいものがもらえるかもしれない。」うつむいていた彼の顔は上を向き、そして彼は、期待とともに2人に見上げました。

男が目あげた時、互いの目は合ったはずです。ペテロとヨハネはすでに彼を見つめていたからです。そして二人は、この男が目についていた期待を読み取ったはずです。しかし、ペテロとヨハネは見つめていました。それは彼の表面的な期待ではありませんでした。彼らが見つめていたのは、彼のもっと深いところでした。この男の奥深くです。そこにはどんな願いがあったのでしょうか。二人が見つめていたのは、もうどこに置いたかも分からない、ほこりをかぶっていた彼の心からの願いでした。そして、ペテロは言うのです。

6節

「金銀は私にはない。しかし、私にあるものをあげよう。ナザレのイエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい。」

「金銀は私にはない。」ペテロにはこの男の期待に応えられる金銀はありませんでした。しかし、彼には持っているものがありました。それはイエス・キリストです。

ペテロとヨハネ、この2人は特別でしたでしょうか。いや、彼らもこの男の前を通っていった多くの通行人と同じ人間でした。いや、むしろペテロとヨハネは金銀すらなかったのです。この男の前を通り過ぎっていったどんな人たちよりも、その日を暮らしていくのに余裕がない者でした。

しかし、ペテロとヨハネは特別でした。それは彼らが確信していたからです。「イエス・キリストはこの男をまことに生かしてくださる方である。」そう確信していました。彼らは特別でした。なぜなら、彼らはその日を暮らしていくことに支配されていなかった。むしろその日だけではなく、生きているすべての日を支配しておられる方に支配されていたのです。

もしかして、私たちは失ってはいないですかね。本当に力ある方が私たちのうちに生きておられることを忘れていないですかね。もしかして、金銀の力を、何かを劇的に変えられる力を手にすることを期待していないですかね。何かにつまずいて、この男のように諦めと無感覚が自分にはふさわしいのだと思っていないですかね。私たちには金銀はありません。いや、そんなことを求めるのは愚かで虚しい人生です。私たちにあるものを思い出しましょう。「ナザレのイエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい。」

7-8節

そして彼の右手を取って立たせた。するとたちまち、彼の足とくるぶしが強くなり、躍り上がって立ち、歩き出した。

どんなことがあっても私たちは立ち上がることができます。どんなことがあっても私たちを立ち上がらせてくださる方がいます。私たちは弱くとも、主は強いのです。

それだけではありません。主は私たちを立ち上がらせ、驚くべきことに、今度は私たちが人を立ち上がらせる者となるよう招いておられます。ペテロとヨハネがそうでした。この二人について、一つ確認しておきたいことがあります。

す。それは、この二人がどこから出てきたのかということです。本日の箇所の前箇所がこのことを語っています。使徒の働き2章42－47節を見てみましょう。

使徒の働き2章42－47節

- 42 彼らはいつも、使徒たちの教えを守り、交わりを持ち、パンを裂き、祈りをしていた。
- 43 すべての人に恐れが生じ、使徒たちによって多くの不思議としるしが行われていた。
- 44 信者となった人々はみな一つになって、一切の物を共有し、
- 45 財産や所有物を売っては、それぞれの必要に応じて、皆に分配していた。
- 46 そして、毎日心をつにして宮に集まり、家々でパンを裂き、喜びと真心をもって食事をともにし、
- 47 神を賛美し、民全体から好意を持たれていた。主は毎日、救われる人々を加えて一つにくださった。

彼らはどこから出てきたのでしょうか。そうです。ペテロとヨハネ、この二人は教会から出てきました。この二人は教会を代表する使徒でありました。つまり、彼らがしたことは、教会のわざなのです。そして、私たちもこの教会に生きているのです。

今読んだみことばは教会について、歴史上初めてのたてられた教会の姿を書いています。実はこの箇所を読み、改めて感謝を覚え、とても嬉しくなりました。何故嬉しくなったかというと、このみことばを読んでいて、言葉一つ一つが具体的にめぐみ教会の中で行われている光景となって湧いて来たからです。

「いつも、使徒たちの教えを守り、交わりを持ち、パンを裂き、祈りをしていた。」
そうです。めぐみ教会は礼拝に生きる信仰者の群れです。

「信者となった人々はみな一つになって、一切の物を共有し、財産や所有物を売っては、それぞれの必要に応じて、皆に分配していた。」

会堂建築では主に対する多くの献身がありました。新牧師館建築も進んでいます。しかし、共有しているのは財産や所有物だけではありません。一切の物です。わたしたちの労力も、知識も、時間も、賜物もです。主がくださったものを、主のために用いようとする姿です。めぐみ教会でこのような姿を見たことは数知れません。そしてこのことを見る度、胸熱くなるチャレンジを受けてきました。

「毎日心をつにして宮に集まり、家々でパンを裂き、喜びと真心をもって食事をともにし、」
家庭集会とおいしいおいしいめぐみうどんが懐かしいですね。また始まる日を楽しみに期待しましょう。

これはどうでしょうか。

「神を賛美し、民全体から好意を持たれていた。主は毎日、救われる人々を加えて一つにくださった。」
民全体からの好意、救われる人が毎日起こされ一つとされる。これはまだ途上ですかね。しかし覚えましょう。礼拝に生きること、そして私たちのあらゆるものを主のために用い、皆で共有すること。このことを誠実に、忠実に続けていく先にこのみことばの成就があるのです。「地域に輝く群れとして」私たちの教会が目指す大切な理念の一つです。そしてこれは、実に主が望んでおられることなのです。

美しの門の前で物乞いをしていた足の不自由な男に考えられないようなことが起こりました。足が丈夫になり、歩き出しました。彼の足が強くなり、歩き出したこと、これがこの日この男にとって、そして彼を癒やした神様にとって最も喜ばしいことだったのでしょくか。そうではないと思います。

7－10節

7 そして彼の右手を取って立たせた。するとたちまち、彼の足とくるぶしが強くなり、

8 躍り上がって立ち、歩き出した。そして、歩いたり飛び跳ねたりしながら、神を賛美しつつ二人と一緒に宮に入って行った。

9 人々はみな、彼が歩きながら神を賛美しているのを見た。

10 そしてそれが、宮の美しの門のところで施しを求めて座っていた人だと分かつと、彼の身に起こったことに、ものも言えないほど驚いた。

この日この男におこつた最もすばらしいことは、この男が心から神様を喜んでいるということです。神を賛美していることです。40年間一度も入ることのなかつた宮に彼は飛び跳ね、賛美しながら入っていきました。彼は心から礼拝する者になったのです。そして、彼は二人と一緒に宮に入っていました。そうです。彼は教会に生きる一人となったのです。きっと、美しの門の輝きが霞むほどに彼は輝いていたでしょう。教会は主イエス様によって輝く群れです。そして、主イエス様によって人々を輝かせる群れです。

神が賛美され、人がまことに生きて輝く教会。心から神を賛美し喜ぶ姿を見て、人々が驚く、地域に輝く教会。輝く群れとなることを追い求めていきましょう。これを追い求めて行くなれば、民全体からの好意は自然と追いかけてくるはずですよ。

大切なことは、私たちにないものを見るのではなくて、私たちにあるものを信じ抜くことです。

ナザレのイエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きましょう。

お祈りいたします。

■応答賛美・席上感謝献金「聖歌201番」

■献金の祈り

■紹介と報告

■4月 ハッピーバースデー

■頌 栄 2021 年テーマソング

■祝 祷